

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04549

研究課題名(和文)日英における「意味深さの評価」の理論と実践に関する研究

研究課題名(英文)Theory and Practice on "Meaningful Assessment" in Japan and UK

研究代表者

川地 亜弥子(KAWAJI, Ayako)

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：20411473

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、客観的な測定・評価が難しく、しかし実践で重視されてきた意味深さに注目し、日英の実践の場を対象に調査した。大人がどのように意味深さを評価しているのかと、意味深さが生じる条件や関わり的一端を明らかにした。

イングランドは、学校選択制、全国学力テストに起因する問題が大きく、各地域、各学校が、そうした問題に対抗するような手立てを講じていた。子ども最優先を原則にする姿勢が明快であった。

日本では、小学校、障害青年たちとのボランティアな学びの場、ミュージアム等での実践を取り上げた。学びの意味深さ、学びの機微を大事にする実践者は、子どもの声、保護者の声をつかみ、しっかり聴きとり、広げていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アクティブラーニングにおける問題の克服を目指して、ディープ・アクティブラーニング(DAL)研究が進行している。DALの源流ともいえる実践は、日本で第2次世界大戦前からあったが、質を求める実践と質を問わないテストという奇妙な接合が行われた。

この克服が期待できるものとして、現代では真正の評価論やパフォーマンス評価が研究されているものの、これらは主に学問・教科内容の深さに依拠している。そのため、子ども・青年たちが個人的な関心や経験と結びつけ、深く思考し表現する取り組みが看過されやすい。

本研究は、上記の課題を克服するために、実践における意味深さの生成とその評価の実態について明らかにし

研究成果の概要(英文): This study focused on meaningfulness, which is difficult to objectively measure and evaluate, but has been emphasised in practice, and investigated it in Japanese and England settings of practice. It clarified how adults evaluate meaningfulness and some of the conditions and relationships under which meaningfulness occurs.

England had significant problems arising from the school choice system and Standard Assessment Tests, and each region and school had taken steps to counter such problems. The disposition of Child First is clear.

In Japan, the study covered practices in primary schools, voluntary learning places with disabled youth, museums, etc. Practitioners who valued the meaningfulness of learning and the subtleties of learning grasped, listened to and expanded the voices of children and parents.

研究分野：教育方法学

キーワード：意味深さの評価 生活綴方 障害児教育 美術教育 進歩主義教育 インプロビゼーション オーラシ
ー ディープ・アクティブラーニング

1. 研究開始当初の背景

日本におけるアクティブラーニング（AL）の積極的導入の中、表面的な活発さを誘発する恐れが指摘され、その克服を目指してディープ・アクティブラーニング（DAL）の研究が進行していた（松下等、2015）。DALの源流とも言える教育は、戦前・戦中から実践されており（勅使河原 2013）、そこでの大きな課題は評価であった。質の評価の困難さから評価不能論・無用論に陥り、あるいは評価を共有可能にする努力が不足し、客観テストの偏重を誘発した。質を求める実践と質を問わないテストという奇妙な接合が行われたのである（川地 2008）。

現代でも、教育実践とは直接関係のないテスト・検定などが成果指標として参照され、この接合は根強い。一方、この傾向の克服が期待できるものとして、真正の評価（Authentic Assessment）論（Hart, D. 1994）の研究、本質的な問いをふまえたパフォーマンス評価およびルーブリック開発研究も展開され、一定の成果が期待できる（西岡 2016、松下・石井 2016）。

しかし、これらの教育評価研究は、主に学問・教科内容の深さに依拠している。そのため、子ども・青年たちが個人的な関心や経験と結びつけ、深く思考し表現する取り組みが看過されやすい。貧困や発達障害、人間関係の不安などから、学習に意欲をもちにくい子ども・青年たちは、学問的な深さへの誘いとその評価だけでは学習に取り組めないことがあり、これが不登校や中途退学の原因・遠因ともなっている。彼らにとっては、稚拙であっても自らの思いを表現し、それを受容・理解され、丁寧に評価されることが重要である。彼らはその中で自己にとっての学ぶことの意味、すなわち個人的な意味深さを感じて、そこから DL に向かうことが報告されてきた（谷 2015、小松・川地 2015）。応募代表者である川地は、自己表現活動とその鑑賞・批評を通じて、学校での学習が学習者個人においてどのような意味を有しているのかという意味深さを評価することが現代の学校教育において重要であるとの指摘を行ってきた（川地 2016）。

こうした問題意識から、川地・勅使河原・赤木は、神戸大学における共同研究として「ディープ・アクティブラーニングの内容・方法・評価——『深い学び』を実現する教員養成・研修の開発」に取り組んでいた。この3名は、これまでに築き上げてきた日本の教師との信頼関係を生かし、教科内容・学問的な深さだけでなく、子ども個人にとっての意味深さについて、教員はどのように見とり、子どもたちや他の教員と共有してきたのかについて研究を進めていた。

2. 研究の目的

上記をふまえ、あえて客観的な測定・評価が難しく、しかし実践の中で重視されてきた意味深さに注目し、どのような条件やはたらきかけの中で学ぶ人にとっての意味深さが生じるか、その場に関わる大人がどのようにつかもうとしているのかの一端を明らかにすることを目的とした。

とりわけ、英国における現代の進歩主義的教育実践と、日本における生活綴方・作文教育、障害青年の学びの場での実践、ミュージアムにおける実践に注目することとした。

英国は、特にサッチャー政権以降、教育の市場化が進んでいると指摘される一方、地域や学校単位でそれを相対化するような取り組みが進んでいる。例えば、「限界なき学び」については、鋒山泰弘（2013）において固定的能力（＝限界；Limits）観と細分化された目標設定を克服するという理論的特徴が紹介されている。さらにその実践校として有名な公立ロックザム小学校（Wroxham Primary School）については、すでに藤森裕治、新井浅浩、藤森千尋によって実践記録が翻訳されている（スワン 2015）。本研究では、大きな目標の共有、教師の見とり、記録・共有、実践改善という教育評価サイクルに焦点をあてて、他の実践校へも射程を広げ、調査・研究を進めることとした。

日本にも、多数のオルタナティブな教育は展開されており、過去・現在の教育評価の理論と実践、とりわけ個人にとっての意味深さを評価する実践について調査・検討を行うこととした。研究メンバーがそれぞれに深く関与している実践を対象とすることで、実践者の見とりや学習者のふり返りについて明らかにすることを目的とした。

日英それぞれの意味深さを重視する実践とその評価について調査することを通じて、日英それぞれにおける教育評価の改善に資することを目的とした。

3. 研究の方法

日本とイングランドのそれぞれで、①意味深さの評価に関する文献調査、②意味深さが生じるような実践と評価に関するフィールド調査、③実践の計画・実施とその評価に関する聴取調査を実施した。

なお、英国でのフィールド調査を毎年行いデータの精緻化を図る予定であったが、パンデミックの影響によりそれがかなわず、研究開始2年目までのデータを主に使用した。国内のフィールド調査も困難を極めたが、オンライン調査を併用して継続的なデータ収集を行うことができた。

4. 研究成果

主たる研究成果については、2022年3月刊行の最終成果報告書にまとめた通りである。以下に概略を摘記する。

日本における調査では、①生活綴方を学校経営の中心に据えている小学校、②障害がある青年たちとのボランティアな学びの場、③ミュージアム、と多様な場での、子どもたちにとっての(そして関わる大人にとっての)意味深い学びが生まれている実践について分析を加えた。

①については、実践者の語りに加えて、卒業生が成人してからの語りを得ることができた。学習指導要領に記されていない生活綴方(作文教育)を学校経営の中心とするまでの経緯に加えて、実践の中心にいた教員だけでなく周囲の教員の変化や協力についても考察することができた。

②については、特に自閉スペクトラム症の人たちへの技能(スキル)に照準を合わせた支援とは異なる支援や場のあり方について、具体的に考察を深めることができ、短所(弱さ)を克服の対象とするのではなく、愛することの重要性が指摘された。

③については、参加者(主催者、支援者、当時の子ども)の20年後の語りから、子どものための美術館教育普及活動の様々な要素が子どもの学びの意味や深さを支えている要素のキーワードを導き出すことができた。

なお、パンデミックは、日本において子どもにとっての意味深さを重視する教育実践との葛藤をもたらした。一方、その中でもあっても、子どもにとっての学びの意味深さ、学びの機微を大事にする実践者は、子どもの声、保護者の声をつかみ、しっかり聴きとり、広げてきたことも聴取調査、フィールド調査で確認できた。

イングランド調査は、研究代表者が、本科研費とあわせて神戸大学若手教員長期海外派遣制度の支援を得たことで、18校への学校訪問が可能となった。イングランドの初等学校は、全国学力調査の影響が強く、実施時期の5月にはなかなか学校を訪問させてもらえなかったが、その中でも受け入れてくれた学校に深く感謝したい。イングランドは、学校選択制、全国学力テストに起因する問題がかなり大きい、調査に伺った各地域、各学校が、そうした問題に対抗するような手立てを講じていた。「子ども最優先」を大原則にしよう、という姿勢が明快であった。

パンデミックで現地調査は予定通りに進まなかったため、国内で取り組めることとして、日英の意味深さを重視する実践とその評価について架橋する翻訳に取り組んだ。これは著作権の関係上、オンライン公開は不可であるが、紙の刊行物として公表し、関係者に配布した。

今後の展望としては、以下の5点が挙げられる。

①意味深さの評価について、中心となっている実践者だけでなく、周囲の実践者も行っているものの、どのようにそれらが共有され(もしくは共有されず)次の実践に向かっているのか。暗黙知とそれを支える言語について明らかにする必要がある。

②特に障害青年の学びの場において、大きな役割を果たしていたものとしてインプロビゼーション(即興)の要素が挙げられる。これが、「弱さを愛すること」や自己肯定感とどのような関係にあるのかを明らかにする必要がある。

③ミュージアムの取り組みについて、本研究で明らかにした要素のどのような点が子どもの学びの質やその深さに関係しているのかを検討し考察する必要がある。そのことによって、美術館における美術教育の意義やそこでの学びの深さを明確にし、今後の美術館教育普及活動実践の理論的裏付けをする必要がある。

④日英における進歩主義教育の架橋として翻訳に取り組んだが、キーワード集などの作成には至っていない。今後、他の研究者もより便利に活用できるような成果公表を行う必要がある。

⑤パンデミックによって予定通りに行うことができなかった英国調査について、追加調査を行い、日英の双方で発表する必要がある。

参考文献

- Hart, S. (2004) *Learning without Limits*, Berksher (UK) : Open University Press.
- 鋒山泰弘(2013)「現代イギリスにおける「固定的能力」観を克服する教育実践の特質」『追手門学院大学教職課程年報』第21号、1-18頁。
- 川地亜弥子・勅使河原君江・赤木和重(2022)『研究成果最終報告書 学習者に「意味深さ」が生じるしかけとその評価——日英における学びの場づくり——』。
- 松下佳代・石井英真(2016)『アクティブラーニングの評価』東信堂。
- 松下佳代他編著(2015)『ディープ・アクティブラーニング——大学授業を深化させるために——』勁草書房。
- 西岡加名恵(2016)『教科と総合学習のカリキュラム設計——パフォーマンス評価をどう活かすか——』図書文化。
- Peacock, A. (2016) *Assessment for Learning without Limits*, Berksher (UK) : Open University Press.
- スワン, M.他著(2015)『イギリス教育の未来を拓く小学校「限界なき学びの創造」プロジェクト』大修館書店。
- 谷美奈(2015)『「書く」ことによる学びの主体形成——自己省察としての文章表現『パーソナル・ライティング』の実践を通して——』『大学教育学会誌』第37巻第1号、114-124頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計30件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 888
2. 論文標題 学校で学ぶことと生活綴方	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 作文と教育	6. 最初と最後の頁 6-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勝冶友紀子, 眞藤拳, 西あかね, 蓑毛智樹, 岸本佳奈美, 徐楽瑤, 川地亜弥子	4. 巻 24
2. 論文標題 意志あるところに道は開ける：ロンドン補習授業校における国語教育	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育科学論集	6. 最初と最後の頁 53-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤木和重, 村上公也	4. 巻 160
2. 論文標題 ゆるる正しさ, ほどける自閉症	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達	6. 最初と最後の頁 60-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勅使河原君江	4. 巻 90
2. 論文標題 KAVC REVIEW 『表現しないうたと身体』 『Composite』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ART VILLAGE VOICE	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 642
2. 論文標題 安心できる人と一緒に生活し、自分で決める：きいてもらう権利	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 みんなのねがい	6. 最初と最後の頁 407
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 32
2. 論文標題 生活綴方・作文教育からみる子どもの発達：生活と表現と集団に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間発達研究所紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 35(3)
2. 論文標題 書くことによって振り返る、書いたことを振り返る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間発達研究所通信	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 878
2. 論文標題 大人も子どもも自己を表現する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 作文と教育	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 885
2. 論文標題 9・10歳 発達をゆたかに生きる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 81-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 877
2. 論文標題 イングランドの学校 市場原理の中で	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 作文と教育	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 35(2)
2. 論文標題 放課後の自由な時間・仲間・空間：こんな学童で過ごしたい	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間発達研究所通信	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 874
2. 論文標題 いつでも本気、子どものことば	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 作文と教育	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 35(1)
2. 論文標題 育ちあう学級づくり	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間発達研究所通信	6. 最初と最後の頁 4-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 873
2. 論文標題 イギリスの子どもと教育・保育・家族支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 作文と教育	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 872
2. 論文標題 状況を深く想像して解決しようとする青年たち	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 作文と教育	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 879
2. 論文標題 子どもととことん追求できる授業	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤木 和重	4. 巻 2
2. 論文標題 新しい学びの文化に出会う	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 シャンティつくば実践報告集	6. 最初と最後の頁 127-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤木 和重	4. 巻 519
2. 論文標題 子どものけんかってすごい：発達の理解と対応	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本の学童はいく	6. 最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地 亜弥子	4. 巻 876
2. 論文標題 学校ぐるみで子どもの表現を楽しむ：公立のごく普通の学校で	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地 亜弥子	4. 巻 346
2. 論文標題 生活を共に楽しむ特別支援教育	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 家庭連 家庭科研究	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地 亜弥子	4. 巻 33-1
2. 論文標題 スポーツ部活動の自治と評価	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 コーチングクリニック	6. 最初と最後の頁 74-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地 亜弥子	4. 巻 46-3
2. 論文標題 発達保障と表現活動	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 障害者問題研究	6. 最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 17
2. 論文標題 生活と表現と集団 生活綴方の観点からー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中部教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 48-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 24
2. 論文標題 主体的な学びを支援する大人と学校	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神戸大学教育学会 教育論叢	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川地亜弥子	4. 巻 44
2. 論文標題 ケンブリッジ大学小学校訪問	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大学評価学会通信	6. 最初と最後の頁 17-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 赤木和重	4. 巻 864
2. 論文標題 わが国のインクルーシブ教育の進展と排除	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 67-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤木和重	4. 巻 29
2. 論文標題 インクルーシブ授業・クラスのためのはじめの一步: 「違い」をとらえる・ひきだす・つなげる	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 授業づくりネットワーク	6. 最初と最後の頁 18-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤木和重・安藤友里・山本真帆・小淵隆司・戸田竜也	4. 巻 72
2. 論文標題 複式学級における教育可能性の再発見: 授業づくり・インクルーシブ教育・自尊感情の視点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 へき地教育研究	6. 最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勅使河原 君江、京谷 晃男	4. 巻 49
2. 論文標題 地域の美術館等における教員研修の意義と課題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 美術教育学研究	6. 最初と最後の頁 241～248
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19008/uaesj.49.241	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 勅使河原 君江	4. 巻 2017
2. 論文標題 西田秀雄の美術鑑賞教育	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 美術教育	6. 最初と最後の頁 40～48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11356/arted.2017.40	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 10件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 川地 亜弥子
2. 発表標題 授業づくりにおける教師の専門性: 深い子ども理解と教育目標の創造
3. 学会等名 兵庫県特別支援学校知的障害教育研究協議会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川地 亜弥子
2. 発表標題 生活綴方・作文教育における作品批評と生活・表現・集団
3. 学会等名 教育目標・評価学会2020年度大会 課題研究 生活綴方・作文教育における教育目標・評価論の展開: 作品批評をめぐる理論と実践の諸相
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川地亜弥子
2. 発表標題 教育実践と発達保障
3. 学会等名 全国障害者問題研究会全国大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川地亜弥子
2. 発表標題 作文や詩から学ぶ 子どもの生活・表現・発達
3. 学会等名 全国作文教育研究大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川地亜弥子
2. 発表標題 作文・生活つづり方：生活と表現と集団に注目して
3. 学会等名 語り合う文学教育の会・奈良作文の会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 勅使河原君江
2. 発表標題 やってみよう！対話型美術鑑賞
3. 学会等名 ミュージアムエデュケーション研究会2019「みんなの学(まな)美場(びば)」(主催 神戸市立小磯記念美術館)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川地 亜弥子
2. 発表標題 幼児教育における目標・評価論 指定討論
3. 学会等名 教育目標・評価学会 公開シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川地 亜弥子
2. 発表標題 小砂丘忠義の言語観：文章記述の常識を手掛かりに
3. 学会等名 教育・授業実践史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川地 亜弥子
2. 発表標題 子どもの小さな声を聴く：現代の作文教育・生活綴方
3. 学会等名 国語教育夏季研究大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川地 亜弥子
2. 発表標題 現代の作文教育・生活綴方：子どもの声の力を実感しながら
3. 学会等名 高知県教育講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川地 亜弥子
2. 発表標題 生活綴方・作文教育からみる子どもの発達：生活と表現と集団に注目して
3. 学会等名 発達診断セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川地 亜弥子
2. 発表標題 東井義雄の教育評価論と綴り方・作文教育
3. 学会等名 言語文化研究フォーラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ayako Kawaji
2. 発表標題 Daily Life Writing in Japanese Schools in
3. 学会等名 ResearchED 2017 National Conference at Chobham Academy, London, UK（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ayako Kawaji
2. 発表標題 How We Research Daily Life Writing in Japan
3. 学会等名 Roehampton-Lleida Seminar Series, at Lleida University, Catalunya, Spain（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ayako Kawaji
2. 発表標題 Practices: Writing, Reading and Sharing Essays in Japanese Schools
3. 学会等名 Roehampton-Lleida Seminar Series, at Lleida University, Catalunya, Spain (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計14件

1. 著者名 日本教育方法学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 図書文化社	5. 総ページ数 160
3. 書名 公教育としての学校を問い直す (担当範囲 第1部-3 子どもの安全・安心を保障する学校づくり (pp.37-52))	

1. 著者名 赤木和重	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 97-124
3. 書名 遊びと遊び心の剥奪：障害と貧困が重なるところで 川田学ほ か (編) 『遊び・育ち・経験：子どもの世界を守る (シリーズ子どもの貧困 2)』	

1. 著者名 赤木和重	4. 発行年 2019年
2. 出版社 世織書房	5. 総ページ数 161-183
3. 書名 発達研究：教育学における発達論の衰退のさなかで 下司晶ほ か (編) 『教育学年報11：教育研究の新章』	

1. 著者名 赤木和重 編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 クリエイツかもがわ	5. 総ページ数 196
3. 書名 『ユーモアの即興から生まれる表現の創発：発達障害・新喜劇・ノリツッコミ』	

1. 著者名 赤木和重	4. 発行年 2019年
2. 出版社 クリエイツかもがわ	5. 総ページ数 36-49
3. 書名 強度行動障害のある人に対する教育実践の現状と展望 三木裕和・越野和之ほか（編）『自閉症児・発達障害児の教育目標・教育評価2』	

1. 著者名 川地亜弥子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 クリエイツかもがわ	5. 総ページ数 92-104
3. 書名 自閉症の子ども・青年と授業づくり 三木裕和・越野和之ほか（編）『自閉症児・発達障害児の教育目標・教育評価2』	

1. 著者名 川地亜弥子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ぎょうせい	5. 総ページ数 62-73
3. 書名 「主体的に学習に取り組む態度」の捉えと評価 田中耕治（編著）『学びを変える新しい学習評価 第2巻 各教科等の学びと新しい学習評価』	

1. 著者名 川地亜弥子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本標準	5. 総ページ数 120-123
3. 書名 行動 学校における創意工夫を実現する：子ども自身の理解と教師の子ども理解が重要 石井英真、西岡加名恵、田中耕治編著 『小学校新指導要録改訂のポイント』	

1. 著者名 神戸常盤女子高等学校編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 神戸新聞総合出版センター	5. 総ページ数 135
3. 書名 ACT STORY：青年期の自立を励ます教育実践記録	

1. 著者名 図画工作科・美術科教育法研究会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 建帛社	5. 総ページ数 216
3. 書名 図画工作科・美術科教育法	

1. 著者名 全国障害者問題研究会兵庫支部、木下孝司、赤木和重、川地亜弥子、河南勝	4. 発行年 2017年
2. 出版社 クリエイツかもがわ	5. 総ページ数 217
3. 書名 実践、楽しんでますか?：発達保障からみた障害児者のライフステージ	

1. 著者名 Yoko Yamasaki and Hiroyuki Kuno (eds), Akira Nakano, Kie Fujiwara, Masayuki Haga, Naoshi Kira, Hiroyuki Sakuma, Ayako Kawaji and Kanae Nishioka	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 222
3. 書名 Educational Progressivism, Cultural Encounters and Reform in Japan	

1. 著者名 宮崎 亮、勝村 謙司 (著) 川地亜弥子 (解説)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 かもがわ出版	5. 総ページ数 167
3. 書名 こころの作文 : 綴り、読み合い、育ち合う子どもたち	

1. 著者名 村田利裕、新関伸也 (編著) 勅使河原君江 (著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 239
3. 書名 やわらかな感性を育む図画工作科教育の指導と学び	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	勅使河原 君江 (TESHIGAWARA Kimie) (60298247)	神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授 (14501)	
研究分担者	赤木 和重 (AKAGI Kazushige) (70402675)	神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授 (14501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	青井 郁美 (AOI Ikumi)		
研究協力者	今西 尚子 (IMANISHI Naoko)		
研究協力者	津阪 菜名 (TSUSAKA Nana)		
研究協力者	花山 陸 (HANAYAMA Riku)		
研究協力者	俣野 源晃 (MATANO Motoaki)		
研究協力者	松山 聖奈 (MATSUYAMA Seina)		
研究協力者	横田 慧 (YOKOTA Akira)		
研究協力者	今井 智恵 (IMAI Tomoe)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	日本における家族支援の課題を探る：イギリスの子ども・家族支援からの示唆	開催年	2019年～2019年
--------	-------------------------------------	-----	-------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------